

インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No. 18

インド・釈尊あれこれ紀行

町中に建つ仏教寺院。入口階段脇に仏像が鎮座している



アルナチャル州知事（右から2人目）との記念撮影



アルナチャル州の仏教徒 カンテイ族

インド渡航歴40回超!

佐藤良純のインド・釈尊あれこれ紀行 No.18



町中の豊かな緑の中にある瞑想センター

アルナチャル州はインド北東部ミャンマー国境に位置する。タイやミャンマーに住む民族と同じカンテイ族が住む地方で、カンテイとは金の場所を意味する。ミャンマーのカチン州には、カンテイという飛行場のある町もある。

アルナチャル州の人口はおよそ14万人。そのすべてが仏教徒で、南方上座部の規則と經典に説かれる教えに従って日常生活を送っている。当然、寺院も多い。町の景観に一体化したカラフルなお寺もある。

釈尊は主にガンジス川周辺にその足跡を残す。しかしこうした北東の町にも仏教が行き渡り、残っているのは、マウリア朝、クシャン朝、グプタ朝と続いた仏教を重んじ、広めた王朝によるものだ。

言語はミャンマー語に近い、リツクタイ語で、独自の文字をもっている。男性も女性も長袖の白い上着と黒いスカートをつけ、装飾



ブラフマープトラ河岸のヒन्दウー教の祠

河での漁にはよつて網が使われている

品としてサンゴや金を身に着けている。人々は定住し農業を営み、ゴマやジャガイモ、魚は食べるが牛肉だけは食べない。

伝統的な民俗舞踊、カーブーンタイダンス、ドラマが舞い踊られる。

最寄りの飛行場はデブルガルで、テリーから一時間、プロペラ機が毎日就航している。更に奥の、ディグポイにはインドには珍しい精油所がある。

雨量も多く湿気も適当にあるので、お茶の栽培環境に適していて、多くの茶畑がある。初めはイギリスの人々が経営していたが、今はすべてインドの人々が所有者である。お茶は世界中同じもので、日本、中国でお茶、英語ではティー、フランス語ではテである。この地方の紅茶は香りがよく南インドの味が濃いお茶とブレンドしたものが好まれる。

この地を流れるのはブラフマープトラ河でチベットの首都ラッサではツアンポ（大きい

お茶の栽培が盛んで茶畑が広がっている



お寺で預かっている孤児たちと一緒に

河の意味」と呼ばれ東から南に流れて、インド東部コルコタ市ではフーグリ河と呼ばれる。河岸には河を神として崇拜する人々が花や果物を捧げる。魚釣りをする人々もいる。

ここには僧院で、孤児院も営むカルナシャー・ストリ比丘が住職で、住職は訪日したことがある。

蛇足だが、この地を私が訪れたのはブツダガヤの菩提寺の元住職だったカルカツタのインド人僧侶に連れていかれたからである。

その僧侶はこのコロナ禍でコロナで命を落としている。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職。大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有餘回。著書に「フツダガヤ大菩提寺」「釈尊の生涯」など多数。